

短 報

外 国 人 肺 結 核 症 例

山 岸 文 雄 ・ 鈴 木 公 典 ・ 伊 藤 隆
林 文 ・ 安 田 順 一 ・ 新 島 結 花
佐 藤 展 将 ・ 白 井 学 知 ・ 庵 原 昭 一

国立療養所千葉東病院呼吸器科

志 村 昭 光

結核予防会千葉県支部

受付 平成元年7月19日

PULMONARY TUBERCULOSIS IN FOREIGNERS

Fumio YAMAGISHI* , Kiminori SUZUKI, Takashi ITOH,
Aya HAYASHI, Jun-ichi YASUDA, Yuka NIJIMA,
Nobumasa SATOH, Takatomo SIRAI, Syohichi IHARA
and Akimitsu SHIMURA

(Received for publication July 19, 1989)

We studied the background and social problems of pulmonary tuberculosis in foreigners which we recently encountered at the National Chiba-Higashi Hospital and the Chiba Anti-tuberculosis Association.

1) The number of foreigners with pulmonary tuberculosis has been increasing year by year ; one in 1983, none in 1984 and 1985, one in 1986, two in 1987 and four in 1988.

2) Most of these patients had been already infected or had some symptoms before their arrival to Japan.

3) Their background includes some serious social problems such as troubles in daily life coming from linguistic and cultural differences and economic difficulties, legal problems such as illegality of their stay in Japan, etc.

4) Most of the above cases could not be treated sufficiently because they are foreigners or because of their illegal stay.

Key words : Pulmonary tuberculosis, Foreigners, Illegal stay
キーワードズ : 肺結核, 外国人, 不法在留

* From the Division of Thoracic Disease, the National Chiba-Higashi Hospital, Chiba 280 Japan.

最近、外国人の肺結核症例を経験する機会が増えているが、その治療にあたり種々の問題点が生じている。また、日本語学校就学生の結核検診で、結核発見率が高い¹⁾との報告もある。そこで、昭和58年から63年までに、当院および結核予防会千葉県支部にて経験した外国人肺結核症例の背景および問題点について検討を行った。症例は、昭和58年1例、61年1例、62年2例、63年4例と、年次的増加傾向が認められた。なお、今回の検討では、長期在留の在日韓国人・朝鮮人の症例は除外した。

症例1: 22歳女性, 韓国人, 留学生。

昭和58年4月, デザイナーの勉強のため来日した。5月, 元気がなくA病院を受診したが肺結核は指摘されなかった。10月, B病院を受診し, 肺結核(塗抹陽性)と診断され, C病院に入院したが, 言葉が通じないため治療を受けられず退院となった。その後結核予防会千葉県支部にて, 外来治療を受けた(塗抹・培養陰性, bⅢ₁)。

症例2: 23歳男性, チベット人, 留学生。

昭和56年, 仏教の勉強のため来日した。11歳時に化学療法歴がある。昭和61年5月, 咳嗽のためD病院を受診し, 肺結核と診断され入院した(塗抹陰性)。6月, 副作用のため退院し医療が中断された。その後頸部リンパ節が腫大したため再入院し, 塗抹陽性にて9月当院に転院となった(G3, Ⅲ₁)。

症例3: 26歳男性, フィリピン人, 飲食店勤務。

昭和62年1月, 観光ビザで来日し, 飲食店に勤務していた。3月, 咳嗽・全身倦怠感出現し増悪したため5月, E病院を受診し, 肺結核の診断で結核予防会千葉県支部を紹介され受診し, 外来治療を受けた(G4, bⅡ₂)。不法在留者で, 当初公費負担を保健所より拒否され, 診療未納金がある。

症例4: 38歳女性, フィリピン人, 主婦。

昭和57年, フィリピンで日本人と結婚し, 昭和58年来日し, 出産した。昭和62年, 夫の会社の検診にて肺結核を指摘され, 同年12月, 結核予防会千葉県支部で外来治療を受けた(塗抹・培養陰性, bⅢ₂)。

症例5: 32歳女性, 韓国人, 主婦。

昭和62年10月, 韓国で日本人と結婚し, 11月より咳嗽出現したが放置していた。昭和63年1月来日した。2月, 咳嗽・喀痰増加し, F病院を受診し肺結核と診断され, 3月, 当院に入院した(G8, bⅡ₂)。日本語がほとんど通せず, また異国での入院生活に耐えきれず, 5月, 帰国療養のため退院した(G5)。

症例6: 18歳女性, フィリピン人, ダンサー。

昭和63年4月, 観光ビザにて来日した。6月より咳嗽・微熱が出現したが放置していた。9月, 40°Cの発熱があり, G病院に肺炎の診断で入院したが, 喀痰検査

で塗抹陽性のため当院に転院となった(G2, bⅡ₂)。当院入院中に妊娠し, 5カ月間の入院の後, 退院と同時に本国に送還された。パスポートは所持していなかった。

症例7: 51歳女性, 韓国人, 主婦。

昭和48年, 来日し結婚した。昭和58年, 一時帰国した。昭和62年9月より咳嗽・喀痰出現したが売薬を服用し, 医療機関は受診しなかった。昭和63年9月, 再来日した。咳嗽・喀痰増加し寝汗も出現したためH病院を受診し, 結核予防会千葉県支部へ紹介され, 肺結核の診断で10月, 当院に入院した(塗抹・培養陰性, bⅡ₂)。

症例8: 20歳女性, フィリピン人, 飲食店勤務。

昭和62年4月, 観光ビザにて来日し, 飲食店に勤務していた。10月, 内縁の夫と同居し, 昭和63年9月, 妊娠5カ月でI病院産婦人科を受診した。10月, 咳嗽・血痰出現し, 11月, 同病院内科を受診し, 肺結核(G2, bⅡ₃)と診断され, 当院に入院した。平成元年2月, 出産したが, 不法在留のため託児所に子供を預けられず, 入院継続できずに外来治療となった。

千葉県の12月31日における外国人登録をした者の国籍別人員(表1)を見ると, この数年間, 1位韓国または朝鮮, 2位中国, 3位フィリピン, 4位米国と順位に変動はないが, フィリピンは昭和60年4.2%から63年10.5%と急増しており, 他の東南アジア諸国, タイ・マレーシア・パキスタンなどの国も, 外国人登録人員の増加傾向が認められる²⁾。このほかに, 不法在留者もかなりの数がいるものと思われる。

東南アジア諸国における結核死亡率は, フィリピン(1981年)では人口10万人対41.7, タイ(1980年)では14.5, ビルマ(1980年)では53.2, インドネシア(1980年)では36.8であり³⁾, わが国における1980年, 1981年の結核死亡率5.5および, 4.9に比較し, かなり高率である。1987年のわが国の結核死亡率は人口10万人対3.3⁴⁾であり, 今後東南アジア諸国からの入国者, 在住者がふえれば, 外国人肺結核症例はさらに増加する可能性が考えられる。

来日前にすでに発病していると考えられた症例は2例, 治療歴のある症例は1例あり, 残る5例中, 来日より症状出現までの期間が1カ月の者1例, 2カ月の者2例であり, これら本国にて発病あるいは感染していたと考えられる症例が, 8例中6例と多く認められた。

結核の治療計画の達成度について検討した(表2)。症例1は, 塗抹陽性で入院したところが言葉がまったく通せず, やむをえず外来治療となった。症例2は, 初めに入院した病院で, 薬の副作用といわれ, 3カ月間治療を中断された。症例5は, 言語・生活習慣の相違にて, 治療途中のまだ排菌している状態で退院・帰国した。症例6は, 5カ月間入院の後, 退院と同時に本国に送還された。症例8は, 出産後, 不法在留ゆえに託児所に子供

表1 外国人登録国籍別人員（千葉県）

	昭和60年	昭和61年	昭和62年	昭和63年
1位	韓国または朝鮮 12,276人(68.4%)	韓国または朝鮮 12,488人(64.9%)	韓国または朝鮮 12,863人(60.4%)	韓国または朝鮮 13,613人(54.0%)
2	中国 2,429人(13.5%)	中国 2,803人(14.6%)	中国 3,280人(15.4%)	中国 4,464人(17.7%)
3	フィリピン 756人(4.2%)	フィリピン 1,080人(5.6%)	フィリピン 1,726人(8.1%)	フィリピン 2,640人(10.5%)
4	米国 706人(3.9%)	米国 860人(4.5%)	米国 982人(4.6%)	米国 1,206人(4.8%)
5	英国 192人(1.1%)	英国 232人(1.2%)	英国 253人(1.2%)	タイ 412人(1.6%)
6	タイ 152人(0.8%)	タイ 151人(0.8%)	タイ 219人(1.0%)	英国 326人(1.3%)
7	ブラジル 105人(0.6%)	ヴェトナム 117人(0.6%)	マレーシア 204人(1.0%)	マレーシア 308人(1.2%)
8	ヴェトナム 104人(0.6%)	マレーシア 107人(0.6%)	カナダ 132人(0.6%)	パキスタン 181人(0.7%)
9	マレーシア 97人(0.5%)	ブラジル 100人(0.5%)	ヴェトナム 118人(0.6%)	カナダ 153人(0.6%)
10	カナダ 85人(0.5%)	カナダ 86人(0.4%)	ブラジル 116人(0.5%)	ブラジル 148人(0.6%)
計	17,958人	19,241人	21,288人	25,226人

表2 外国人肺結核症例の治療上の問題点

	年齢	性	国籍	職業・入国目的	病型	ガフキー	問題点	治療
1 (S58)	22	女	韓国	勉強 (デザイナー)	bⅢ ₁	0	言葉が通じないため入院継続できず、 外来治療	完了
2 (S61)	23	男	チベット	勉強 (仏教)	ⅠⅢ ₁	3	治療歴あり 副作用のため3カ月間治療中断	完了
3 (S62)	26	男	フィリピン	飲食店勤務	bⅡ ₂	4	不法在留 公費負担拒否(診療未納金)	完了
4 (S62)	38	女	フィリピン	日本人と結婚し、 来日	bⅢ ₂	0		完了
5 (S63)	32	女	韓国	日本人と結婚し、 来日	bⅡ ₂	8	本国で発病。言語・生活習慣の相違 により2カ月で退院・帰国	中絶
6 (S63)	18	女	フィリピン	ダンサー	bⅡ ₂	2	不法在留 入院中妊娠し、退院と同時に本国送還	中絶
7 (S63)	51	女	韓国	在日韓国人	bⅡ ₂	0	本国で発病	治療中
8 (S63)	20	女	フィリピン	飲食店勤務	bⅡ ₃	2	不法在留 出産後入院継続できず	治療中

を預かってもらえず、入院が継続できずに外来治療となった。

医師の側に問題のある症例2を除き、外国人であるがゆえに、あるいは不法在留であるがゆえに、入院が継続できなかったり、治療途中にて本国に帰国してしまった、あるいはさせられてしまった症例が8例中4例もあり、十分な治療を受けられなかったのは問題であると思われる。治療を妨げる因子として、言語・生活習慣の相違による支障が2例、経済的な困難性が1例、在留の違法性が3例認められた。

また、自覚症状出現から医療機関受診までの patient's delay は、ほとんどなしが3例、1カ月1例、2カ月1例、3カ月2例、1年1例であった。不法在留者3例の patient's delay はそれぞれ1カ月、2カ月、3カ月で、すべて塗抹陽性で、エックス線病型では両側の有空洞例であり、今回の検討では症例が少ないため断定はできないが、不法在留者は、不法在留ゆえに patient's delay

が長く、受診時にすでに病変が進行している可能性が考えられた。

今後も東南アジア諸国からの入国者、在住者がふえれば、わが国における外国人肺結核症例は増加するものと思われるが、彼らの治療を妨げる因子を解明し、医療の中絶を防止する必要があると思われた。

本論文の要旨は、第64回日本結核病学会総会（1989年4月、大阪）にて発表した。

文 献

- 1) 新聞報道
- 2) 千葉県調査
- 3) 林 新澤：東アジアおよび南太平洋地域における結核の問題とその対策，結核，59：409～420，1984.
- 4) 厚生省保健医療局結核難病感染症課編：結核の統計，1988.